



「174のころ」

私には、長女25歳、次女22歳の娘がいます。長女は結婚して1歳になる娘がいます。私にとっては初孫です。

その孫も縁あって今年の4月から武雄こども園にお世話になっています。毎日近くで孫の成長まで見ることができて、本当に感謝しかありません。

娘夫婦も感謝しながらも、我が子が日々どんな風に園で過ごしているのか心配だったり、楽しく遊んでいるのか…そんなふうに思っているときにタイミングよく、先月保育参加がありました。とても楽しみで仕方なかったようです。

保育参加の次の日、娘からすぐに連絡が来ました。

サプライズ動画を観て、また園長先生の保育に対する熱い思いを聞いて感動しそして涙し、それから親子で楽しい時間を過ごしたとのこと。そして「お母さん～、お母さんって毎日感動する仕事できていいなあ、羨ましい」と。

それを聞いてとても嬉しく、涙腺の弱い私は泣きました。

改めて保育士という職業に誇りを持ち、これからも大切なお子様と共に、楽しく今を大切に「未来」へのお手伝いをさせてもらおうと思いました。





それぞれの場所での子どもの育ちを共有する先生たちの表情はどれも柔らかく、まるで我が子を語る「お母さん..のよう。いわば一つのおうちのような、みんなひとつの家族のような、そんな武蔵野こども園を目指しています。クラス担任だけでなく、戸属や職種の違いを超えて、園の職員全体で大切なお子さま一人ひとりを丁寧に見守っていきます。おうちのようにホッとできる場所があるようにと願っています。😊

夏休みが始まり、卒園した子どもたちが帰ってきてくれる姿を見て、たった数か月の間に逞しく成長したなあと嬉しく眺めています。

先日の保育参加でご紹介した詩に、「母よ 抱きしめなさい 子を もう何もしてやれない日のために」という一節があります。心は勿論ずっと一緒にあるけれど、いつの日か我が子は自分の世界へと羽ばたく日が来ます。まずは小学校。そして中学校・・・と、私たちの知らない時間と世界が増えていく。その時々で出会うもの、出会う人から、我が子はどんな影響を受けるのでしょうか。もちろん、全てがキラキラと輝いていて、包み込んでくれるような未来であってほしいけれど、もしかしたら、こんなはずではなかったと戸惑い、自分なんて、と思う時があるかも知れません。それは同時に世界がとてつもなく冷たく、自分の存在に疑問を感じる時。

その時に大切なこと。それは、どれだけ時間や場所、周囲の人が変わろうとも、永遠に変わらない事実を思い出すこと。つまり、自分にしか出来ないことや幼少期に夢中で追いかけた好きなもの、無条件で大切にされたあの日、あの人がくれた温かな言葉や想いを思い出すこと。それは誰にも踏み荒らされない自分だけの絶対領域。

その領域は透明でしかなかった自分という存在を、本来の自分の色の世界へと連れ戻してくれます。そして自分の色を思い出せたなら、それが、他の人の色を見つける力となり、自分の暮らす世界は、こんなに色に溢れていたのだと気づかせてくれる。

ずっと一緒にいられないからこそ、私たちが育てたいのは、自分だけの色をいつでも思い出すことができ、同時に周りの人の色を見つけることができる人。つまり、何回でも「自分を大切に直すこと」ができる人。そんな人たちが織りなす未来を想像するだけで、ワクワクしませんか。

私たちの日々の教育・保育が、子どもたちにとっての絶対領域の一片となり、色で溢れた未来への梯子の一段となるよう願いながら、今日も園に関わる全てのお子様をお迎えさせていただきます。

